

林政隔週刊 RINSEI NEWS

平成 27 (2015) 年 10 月 21 日 (水)

第 519 号

■ニュース・フラッシュ

- TPPが大筋合意、林産物で初のセーフガード
- バイオマス発電の事業採算性評価ツールを開発
- 飛鳥建設と吉里吉里国が長官賞受賞、間伐コン

■緑風対談

TPP林産物交渉の詳細を探る
3つのポイントで日本が論陣

■遠藤日雄のルポ&対論

製材からCLTまで木材産業バックアップ・鈴工

■突撃レポート

「木のカタマリに住む」が提示する“もう1つの道”

■地方のトピックニュース

関東局・碓氷川森林組合・アイザックが中国輸出
東京・新橋で初の「おかやま木製品フェア」開催
りんご剪定枝も利用、青森県内初のバイオ発電所
長野県版「森のようちえん」で72団体に初認定証

■寄稿

林業機械展とフォレスター・ギャザリング開催

3

7

10

14

17

21



「森と木の国あきた展 2015」が 10 月 7 日から 9 日まで、東京都新宿区の新宿パークタワーで開催された。7日のオープニングセレモニーには、なまはげや同県のキャラクター「スギッチ」、「森っちゃん」も駆けつけた。(関連記事 p17 参照)

隔週水曜日発行

平成6年6月9日第三種郵便物認可



森と木とのつながりを考える
(株)日本林業調査会

発行所 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2 丁目 8 番地
岡本ビル 405

TEL (03) 6457-8381

FAX (03) 6457-8382

取引銀行 三井住友銀行飯田橋支店(普) 810522

郵便振替 00160-8-98120

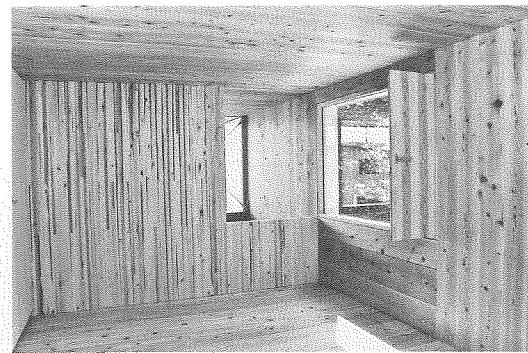
発行人 辻 潔

年間購読料 15,000 円 (1 部 800 円、消費税別) (禁無断転載)
電子版 (PDF、1 部 800 円) も販売しています。

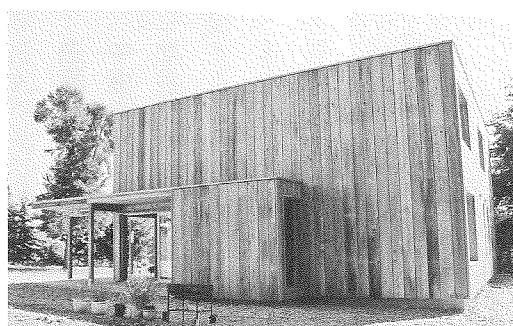
再生紙を使っています。

インターネット・ホームページ <http://www.j-fic.com/>

突撃レポート 「木のカタマリに住む」が提示する“もう1つの道”



天井・壁・床に乱尺の平角材、正面の壁には丸みのある間柱材を使用（2階部分）



グッドデザイン賞を受賞した「木のカタマリに住む」、全体がスギ材で覆われている

今年4月、静岡県富士宮市にある住宅地の一角に、一風変わった2階建て住宅が現れた。外壁はびっしりとスギの板で覆われており、開口部から見える内部もスギだらけ。これでもかというくらい木を使つた「無骨」ともいえる建物。この家がグッドデザイン賞に選ばれ、審査員からは、「中小規模の生産者でも加工や施工が可能な構法を構想し、独自の空間デザインに結実させた」と高く評価された。

木の持つ多面的な機能を総合的に引き出し、仕事もつくる

今年（平成27年）のグッドデザイン賞（ベスト100）に選ばれた住宅「木のカタマリに住む」が注目を集めている。製材所の片隅に「眠っている」デッドストックの木材を引っ張り出して新築住宅を建てた斬新さだけでなく、従来の木材利用に捉われない着想と実践に満ち溢れているからだ。（文中敬称略）

施主は、法政大学デザイン工学部建築学科教授の網野禎昭（第434号参照）。網野は、CLTの利用をはじめとした「都市の木造・木質化」で意欲的な活動を続ける気鋭の学者として知られる。だが、このようなプリミティブな家づくりを、「前からやりたかった」という。なぜなら「木の持つている多面的な機能を総合的に引き出すためには、カタマリで使うに限る」からだ。

一般的な軸組構法の木造住宅では、「木の構造的な機能しか使っていない」のに対し、この家では、壁・天井・床に大量の木を使うことで、強度や断熱・蓄熱性、調湿性などがバランスよく発揮され、落ち着きや安心感など心理面にも好影響があり、各機能の相乗効果も期待できる——こう話す網野は、

オルタナティブ・ウェイ

突撃レポート 「木のカタマリに住む」が提示する“もう1つの道”

「木は、地域に仕事をつくることもできる」と語調を強めた。

流通というファイルターを通して、製材所の眠れる資源を活用

「木のカタマリに住む」の外壁と床、屋根には、厚さ12cm・長さ3~6mのスギ芯持ち平角材を横に並べ、構造用ビスでつなぎ合わせている。内壁には、スギの間柱材を釘で接合して使用。いたつてシンプルなつくりの中で特徴的なのは、平角材の幅がまちまちで、節や割れも入っていること。間柱材も角に丸みが残っている。表面仕上げや塗装などもしておらず、いわゆる「商品」とはいいがたい木が採用されている。

網野は、これらの木を栃木県内の製材所から調達した。製材所の隅にあつたデッキストックに目をつけて、まとめて買い上げたのだとう。なぜ、そんなことをと問うと、「流通というファイルターを通して「くなかつた」との答えが返ってきた。「市場には“売れるであろう”という木しか出てこないが、実際には、商品にならない隠れた木がたくさんある。それを利用できれば、製材所の歩留まりが上がり、大工や川上にも仕事と利益が回るようになる」と言う。

網野は、大量生産型の家づくりを否定しているわけではない。「日本の住宅需要を満たしていくには必要」と認める。ただし、国中が量産一辺倒に流れがちな現状には危機感を隠さない。「資本力のない中山間地域の製材所や工務店は、独自の付加価値を持たなければ生き残つていけない。こんなやり方もあるという選択肢を示したかった」と狙いを口にする。

薪のクッキングストーブが生み出す“熱”を多段階に利用

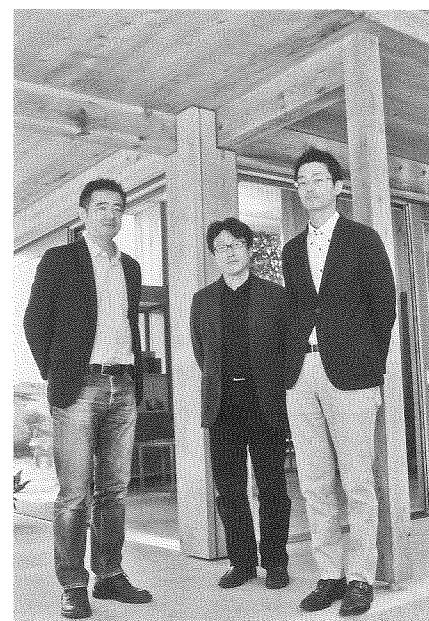
「木のカタマリに住む」は、エネルギー利用の面でも、ユニークな試みを行っている。熱源は、キッチンに設けられた

クッキングストーブ。ここで薪を燃やし、調理をすると同時に温水をつくる。温水は、家中の



熱利用の“心臓部”である薪を燃料に使うクッキングストーブ

央に設置された1トンの蓄熱タ

オルタナティブ・ウェイ
「木のカタマリに住む」が提示する“もう1つの道”

網野教授（左端）と平成建設の角田（中央）・奥村（両氏）

勢い込んで「普及」を図るのではなく、今ある材料と人、能力で新しい道は切り拓いていく。「木のカタマリに住む」は、そんな可能性を示している。

「木のカタマリに住む」は、何構造というのか——網野はしばしばこのような質問を受けて、思案顔をみせる。「ドイツ語で言えば、ホルツマッシブバウですかね」。バウは建設、マッシブはムク（無垢）とかカタマリ（塊）の意味。これにホルツ（木）という接頭詞がついて、木の面構造となる。

もつとも網野は、このホルツマッシブバウの標準化やブランド化を目指しているわけではない。「似たような取り組みが地域ごとに出てくれば面白い」と、いたって自然体の構えだ。

設計・施工を担当した（株）平成建設（静岡県沼津市）の設計部主任・奥村賢史は、「丸みのある木でも寸法が悪いわけではないし、細かい暴れは現場で微調整すればいい」と言い、設計課長の角田充も、「初めてだったので工期は半年ほどかかったが、施工自体が特別難しいことはない。建築コストも抑えられる」と話している。

この家には、網野の両親が住んでいる。つまり、高齢者向けの住宅なのだが、「バリアフリーなど行動機能的な話だけではなく、本当に健康な家をつくりたかった」という。そのために、「機械空調や断熱で室内の温熱環境を物理的にコントロールするのではなく、木のカタマリとしての機能を活かす」ことにしたのだ。

シングに送られる。これに屋上に設置されている太陽熱集熱器からの熱も加わり、一定の温度の水が床下のパイプを巡って家全体を温め、常時給湯も可能にしている。エアコンはない。1階の開口部が広く、自然通風と木の蓄熱性や調湿性によって夏場もしのげるからだ。